
魔女とキャンディーと僕とキス

カオリエンドウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔女とキャンディーと僕とキス

【Nコード】

N1586E

【作者名】

カオリエンドウ

【あらすじ】

2000年夏、ニューヨーク。これは僕が出逢った嘘のような本当の話。信じるか信じないかは君の自由。

第1話：She's a Witch

暑いニューヨーク、二年目の夏休み。

僕はまだ19歳の大学生だった。

大学の寮を出て暮らしたいと考えていた僕は、目に飛び込んできたのは、一枚の広告。

1・She's a Witch

彼女は魔女だった

『ルームメイトを募集中：男性限定

人間の世界について色々教えてくれる人希望

家賃は月6ドル

連絡は魔女のアシュリー・ベルまでお気軽にどうぞ』

「6ドルだって!？」

大学の掲示板の前で僕は思わず声を上げていた。

破格の値段だ いや、むしろ冗談か、印刷のミスか。

僕はその他も色々おかしい内容は一先ず無視して、家賃を確認するために広告をひっぱがして公衆電話に走り出していた。

まあ、つまり貧乏学生だったんだ。

そこは大学から徒歩15分ほどの小さなアパートメント。
彼女の部屋は最上階の306号室。

「こんにちは！さっき電話をしたジェフリー・オブライエンですけど」

ドアベルを鳴らしながら声をかける。しばらくするとドアが開いた。
「ようこそ、はじめまして。こんにちは」

高めの声と共に出てきたのは、緑のくりっとした目が印象的などう見ても15・6歳の女の子。

あれ？電話に出たのはもつと落ち着いた声の女の人だったぞ。

「どうぞどうぞ。待ってたのよ、遠慮せずに入って」

女の子は僕をちらっと見てそう言うたさっさと中に戻って行った。

僕は慌てて後を追いかけながら女の子を観察する。黒い髪は肩より下くらいの内巻きカール。長袖にひざ下までの黒いワンピースを着ていた。

この季節に真っ黒って暑くないのかな。

案内されたリビングは僕が今まで見たことのあるどんなリビングよりもカラフルだった。

赤とオレンジのソファに黄色いローテーブル。

壁際には鮮やかな黄緑色のブックシェルフ。

キッチンにはピンクでカウンターにはこれまた赤やオレンジの椅子が並べられていた。

天井からは明るいライトと共にフェルトで作ったらしい色とりどりの花の飾りときらきら光るビーズがぶら下がり、唯一まともな淡いクリーム色のカーテンにも花の飾り。

「これは……すごいね」

いろんな意味を込めて言うと、女の子はにっこりした。

「ありがと。そうでしょう？ママからは魔女らしくないからやめ

なさいって怒られるんだけど、あたしはカラフルなのが好きなの」
目がちかちかしてきた。

「えっと、家賃の話なんだけど……………」

僕は大事な話題に切り替えた。

さっき電話をしたら、大事なことなので直接話したいと言われたのだ。

「あ、そうそう」

女の子は思い出したように言う。

「適当に座ってくださいな」

僕は彼女の反対側のオレンジのソファ―に腰掛けて聞いた。

「あの、さっき電話で話をした女の子は？君のママだと思うんだけど、今どこにいるの？」

「電話の話？あれ、あたしよ」

でも声が違う。僕が怪訝そうな表情をすると女の子は続けて言った。

「だって、あたし魔女だもの。声を変えるくらいなんともないわ」

ああ、広告を見たときから無視し続けていた点とついに向き合うべき時が来た。

「魔女？君、広告にも魔女って書いてたけど、魔女なんているわけないだろう。ここには君が一人で住んでるの？お母さんは？」

すると、女の子はムツとした様に言った。

「子ども扱いしないでよね。あたし、こう見えても今年で100歳になるんだから。あなたよりもずっと年上よ」

「100歳だって！？どうみたって15、6歳の女の子にしか見えないじゃないか。あんまり冗談を言うのは良くないよ」

「あっ！あたしの気にしてること言ってたわね！それ、今度言ったらあなたのことねずみに変えてやるんだから！！」

彼女は怒り出した。

気にしてたのか……………。じゃない、話にならない。

「今日は家賃の話をしに来たんだ。話が出来ない人がいないんじゃないか？」

僕は立ち上がろうとした。

「広告に書いてあったでしょう！家賃は6ドルよ。それに、ここに住んでるのはあたし。」

あ、た、し、がルームメイトの募集をしたの。人間の男に慣れるために。」

最後のところは聞き流すことにした。

「本当に6ドル？ たった6ドルでいいの？」

「そうよ。え、………なにかまずかった？」

女の子は急に心配そうになった。

「あたし、人間の世界のこと、いまいち良く分からなくて。別にお金が必要なんじゃないの。早く人間の男に慣れて、1ヶ月以内に儀式を終わらせなくちゃいけないから………」

彼女はまたよく分からないことを言った。

でも、6ドルっていうのは本当らしい。ちょっと変な子だけど

害はなさそうだ。

ここなら大学も近いし、何よりこの辺りに6ドルで住めるなんてこれ以上のラッキーはない。

「いいや、何も問題ないよ。じゃあ、えつと………僕は人間の男だから、6ドルでここに住めるんだよね？」

「そうよ、じゃ、契約成立ね」

女の子はうなずいて指を鳴らした。

すると、壁際の青いシェルフの一番上の引き出しが勝手に開き、紙が一枚飛び出して僕の目の前の黄色いローテーブルの上にすべりこんできた。

目を丸くする僕の前で、彼女はもう一度指を鳴らす。

すると今度はシェルフの上のペン立てから、ピンクのふわふわの飾りの付いたペンが飛んできて僕と彼女の間に浮かんで止まった。僕は思わず、手を伸ばしてペンを受け取る。

「それ、契約書。サインしてね」

女の子はにっこり笑ってそう言った。

彼女は、本当に魔女だった。

第2話：Her Dream

それでも僕は引越した。

だって君はあまりにも魔女らしくなかったから。

2・Her Dream

不可思議な日常

「アシュリー・ベル……よ。ラストネームは秘密。魔女は簡単に人間にフルネームを教えちゃいけないの。アシュリーって呼んで」

「よろしく。アシュリー、僕のラストネームを君が知ってる事に問題は無いの？」

「問題ないわ。別に、名前を知ってても知らなくても服従させることはできるんだから」

アシュリーはちよつと低めの声でそう言ってから、

「でもあたしはそんなことしないから安心して……あ、今の魔女っぽかったでしょ」

と明るく言って、うふふつと笑った。

アシュリーは全然普通の人間と変わらなかった。

僕も彼女が魔女だって分かって、わざわざここに住む理由もなかったんだけど彼女はどう見ても僕に危害を加えそうには見えなかった。まあ、さすがに「ペットのチャーリーよ」と真っ白なハツカネズミを紹介された時にはちよつと考えたけど。チャーリーが前は人間だったなんてことだけは勘弁して欲しい。

あと、彼女は結構おしゃべりだった。

僕が荷物の片付けに手を動かしている間、彼女の口はずっと動いていて

今まで人間世界で見たものがどんなにすばらしいかを延々と語って聞かせてくれた。

それによるとアシュリーはカラフルな色のもの、キラキラしてるものの、いい匂いのお花、可愛いものと甘いお菓子が大好きらしかった。魔女の国は基本的に暗い色のものしかなくて、甘いお菓子もあんまりない。魔女の世界でアシュリーの趣味を満たしてくれるものはなかなか見つからなかったそうだ。

魔女は普通、気持ち悪いものや醜いもの、グロテスクなものを愛するんだって。

でも、アシュリーは違う。

お菓子は黒っぽいチョコレートより可愛いキャンディー、飲み物はキラキラ光るスプライトがお気に入りだと教えてくれた。

「あたしの夢は偉大な魔女になって、ニューヨークの夏の晴れた日にカラフルなキャンディーを降らすことなの」

アシュリーは胸を張ってそう言った。

まるで子供の夢じゃないか。僕は笑いながら聞いた。

「どうして？」

「人間で甘いものが好きでしょ！？みんな喜ぶわ。それにキャンディーが太陽に当たってキラキラして……絶対に綺麗に違いないもん」

最後のほうはうつとりだ。

「期待してるよ、頑張って」

ほらね。思った通り、ちょっと変わった普通の女の子だ。

次の日の朝食は、アシュリーが作ってくれた。

それはもう、芸術的な色彩だった。

彼女の愛するカラフルな野菜の代表格、ピーマン、パプリカとトマトがふんだんに使われたサラダの美しさといったら……高級レストランの一流シェフもびつくりに違う。

そしてアシュリーは一日に一度、必ず思い出したように外出する。

帰ってくるときは必ず何かを両腕に抱えていた。

人間の世界に不慣れなんじゃなかったのか？

ちゃんと買い物できてるじゃないか。

でも、その買い物は全然普通じゃなかったんだ。

まあ、後に僕はその驚きの外出の正体を知ることになったんだけど。

その日は大学の図書館で勉強した帰りだった。

通りに面した靴屋から銀色の靴を抱えたまま、ふらりと店を出るアシュリーの姿を発見したのだ。

僕は慌てて、思わず反対側のストリートから声をかけた。

「アシュリー！！」

僕も驚いたけど、アシュリーはもっと驚いたらしかった。

「わ、わ、わ、ジェフリー、しー。気づかれちゃうよ！」

「気づかれちゃうよ、じゃないだろう！お金払ってないだろう」

「お店の中にいる人には、魔法をかけたんだよ。だから大丈夫なの。今大声上げたら魔法がとけちゃうよ」

店の中にいる人には魔法が利くそうだ。

だから物を持ち去ってもばれないし、捕まらない。

魔法ってなんて便利なんだろう。

でも、アシュリーは、「きつとママならニューヨーク中の人間にだって魔法がかけられるんだ。でもあたしの力は弱いから、お店の中だけで精一杯なの」と残念そうに言った。

初めての一週間。

その気まぐれな外出の他にアシュリーが毎日したことといえば、ハツカネズミのチャーリーと遊んで、相変わらずカラフルな食事を作るだけだった。夜には僕と二人でキャンディーをなめながらおしゃべりするのが恒例になった。

アシュリーは人間の世界で気になっていた、いろんな事を僕に質問した。

例えば「夜、光っている看板は何で出来ているの？」とか、「あの光を家に持って来られない？」とか。

僕は看板を家に運ぶのは無理だと思うけど、クリスマスの時期になると出回る豆電球なら看板に負けないくらいカラフルだよ、と教えてあげた。

彼女の生活に変化が起きたのは引越し後、初めてのウィークエンドだった。

第3話：Mom's Appearance

本物の魔女。

成人の儀式と彼女の決意。

3・Mom's Appearance

ママの登場

「アッシュリー!!!」

「ひゃあああああつ!!!」

その日はものすごい怒鳴り声と甲高い悲鳴から始まった。

慌ててベッドから這い出てリビングに向かうと、そこにはアッシュリーと一人の女性が立っていた。

僕はその姿に軽い感動すら覚えた。

それはまさしく『魔女』だった。

黒いローブに深い緑のワンピース、トンガリ帽子をかぶってほうきを持ったその女の人は妖艶な笑みを浮かべて言った。

「あら、初めまして。あなたがジェフリー?」

そして、黒い爪を長く伸ばした手を差し出した。

僕はその手を握っていいものか、隣りの泣き出しそうなアッシュリーを無言で見る。

「大丈夫よ。その人、あたしのママだから」

僕は手を差し出して握手をした。

「はじめまして。ジェフリー・オブライエンです」

心の中で、なんでこんなに似てないんだ、と思いながら。

アシュリーのママは、それはそれは力の強い魔女だそうだ。

好きな色は黒。醜いもの、気持ち悪いものを愛する典型的な魔女。アシュリーとは正反対だ。

見た目だってそう。豪華な黒のウェーブヘアにセクシーな深緑の目、ナイスなプロポーシヨン。本当にアシュリーと血が繋がっているのか疑ってしまうほどゴージャスなのだ。

そんなゴージャスな自分から生まれた一人娘が落ちこぼれの魔女だったから、ママは大いに困惑した。成人の儀式的終了期限が近づいているのにいっこうに動き出そうとしないアシュリーに痺れを切らし、わざわざ魔女の国から出てきたらしかった。

そう、アシュリーは成人の儀式的のために人間の世界にいる。

魔女の成人の儀式とは、『人間世界に好きな男をつくってキス』する事。

そのために魔法を使ってはならない。だからわざわざ6ヶ月もの期間が与えられるのだ。

アシュリーもうすでに5ヶ月と1週間を人間世界でエンジョイしてしまっていたらしかった。

「えっと、キスをされた男はどうなるの？」

僕は気になった点を投げかける。

「人間の男がキスをされたら、その人の一番大事なものが魔女に奪われちゃうの」

アシュリーの答えにママはにやつとした。

「つまり、魂ね」

魔女とキスしてしまった男は10日以内に死んでしまうらしい。

「素敵だと思わない？」ママは言った。「男は死んで、私だけのも

のになるのよ!」

わお、これぞ本物の魔女。

「ママ、怖いでしょ」

アシユリーが声を潜めて言う。

おいおい、君だって魔女だろう。

「アシユリー! あなた、ぼやぼやしてる時間なんてないのよ! あと、3週間ちよっとしか残ってないの。いい男を見つけてさっさとキスしてしまいなさい。儀式を終えられなかった魔女がどうなるか知ってるでしょう?」

ママは早口でそういうと、アシユリーを脅すように睨み付けた。

「どうなるの?」

僕は聞いた。

「怖いこと、大変なこと、痛いこと 詳しくは教えてもらえないの」

アシユリーはそう答えてぶるつと震えた。ママはなんだか複雑な顔をした。

なんとなく、恐ろしそうな雰囲気だ。

「あと、この坊やはだめよ。」ママは僕を見た。

「初めてのキスは一番醜くて悪くて愛すべき男でなくちゃ。この坊やじゃみんなに馬鹿にされるわよ……まあ、私はちよつとかわいいとは思っけど」

完璧な微笑み。

「いえ、遠慮しておきます」

僕はこわばった顔で笑い返した。

「そう。良かったらいつでも言って?」

そう言くと、ママは「立派な魔女らしく、しっかりやりなさい。いいこと、ほかの魔女たちを見返してやるのよ」と再びアシユリーに渴を入れ、僕に流し目をくれると窓からほつきに乗って颯爽と去って行った。

「あたし、一生懸命がんばってみるわ。立派な魔女になって夢を叶えるために」

その夜、アシュリーは笑顔で力強く宣言した。

「出来る範囲で協力するよ」

僕たちはキラキラの泡が次々に生まれるスプライトで乾杯した。

第4話：Get Ready

本物の魔女に近づくために……
3週間、彼女はあらゆる努力をした。

4・Get Ready

君は頑張った

アシュリーはまず、キラキラの食事をやめた。
「毒の大鍋を作るの」と、その日、朝からアシュリーは大いに張り切っていた。

どこから見つけてきたのか黒や茶色、紫や深緑色のあやしい食材をまとめて鍋に放り込んで火にかけた。
次に、ペットショップに出かけていきクモやトカゲ、カエルにコウモリをもらってきた。もちろん、魔法を使って勝手に取って来たんだけど。これもまとめて鍋に放り込んだ。

その次はなんだかよく分からないもの。不自然な黄緑色のドロドロのスライムのようなものだったり、赤黒い塊だったり。

それはなに？と聞く僕にアシュリーは「知らないほうがいいと思う」と返した。

それから香辛料や薬草。香辛料はインド料理屋と韓国料理屋から。薬草は中国系の漢方のお店。

僕はここまでが限界だった。

漢方を鍋に投入した瞬間になんとか分からないけどすごい煙と鼻がもげそうな強烈な匂いが部屋に充満
慌てるアシュリーをそのままに、僕は部屋から避難した。

夜、恐る恐る部屋に帰るとリビングはいつも通り。

幸運な事に爆発は起きなかったようだった。

匂いは全部消えて変わりにカウターの白いクチナシの花がいい匂いを放っていた。

次に、かわいい物のコレクションをやめた。

その代わりに「気持ち悪いもの、醜いものを集めるの」といふようなところに出かけてはせつせと部屋に持ち帰った。

それは例えば、アフリカのイボ族って民族の仮面だったり、すごく古いくるみ割り人形だったりしたんだけど・・・。

はつきり言って、どれもいまいち“微妙”だった。

それを告げるとアシュリーは「これがあたしの精一杯なの」とうなだれた。

最後に、最も心が醜くて見た目が恐ろしい男を探しに出かけた。

アシュリーはニューヨークの街をうろうろ歩き回り、目をつけた男の後を追跡した。

要するにストーキングした。でもこの言葉は使いたくない。

だって、ここでは僕も大いに貢献したんだ。

初めての『リサーチ』の時、濃い紫色のワンピースに黒いローブ、黒のトンガリ帽子という典型的な魔女ルックスで出かけた彼女は途中お巡りさんの質問に会い、男を見失ってしまったのだ。僕は、普通の女の子に見える服装のアドバイスをしてあげた。

三週間のリサーチで、アシュリーはキスの相手を5人に定めた。

それはもう、見るからに悪そうな男たちばかりだった。

僕は反対したけどアシュリーは胸を張って言った。

「この5人だったら、誰とでも問題はないわ。とびつきり心の汚い人たちですもの」

魔女には人間の心がよく見えるそうだ。どの人がいいかピンと来る

んだって。

そして、ついに実行の時が来た。

僕のアドバイスどおり、ジーンズのスカートにタンクトップ、いつかアシュリーが取ってきたシルバーの靴。

うん・・・なかなか可愛い。

一人目の男に声をかける。

男は相手にしてくれない様子だったけど、アシュリーは諦めずに声をかけ続けた。

「うざってえんだよ！！さっさと失せろ、このガキが！」

でも、しつこく声をかけるアシュリーについに男がキレた。

この怒鳴り声にアシュリーはほんとにびっくりしたみたいで、ビル
の陰から見守る僕のところへ一目散に駆け寄ってきた。

「うざってえって言われたの。・・・うざってえって、何？」

アシュリーは涙ぐみながら僕に聞いた。

言葉の意味は知らないみたいだったけど、その言葉の持つ強烈なインパクトは十分に伝わったようだった。

他の3人も同じような感じだった。

けれど、アシュリーは見ている僕が心を痛めるほどひどい言葉で罵倒されても、最後まで諦めようとはしなかった。

努力が叶って、最後の男は誘いに乗ってきた。

でも、にやにやしながら近づいてくる大男に恐れをなして彼女は逆に逃げ出してしまったんだ。

ほら、だから言ったじゃないか、アシュリー。

君にはどれも手強すぎる相手だったんだ。

その夜、豆電球の光が輝くりビングのすみっこで、彼女は膝を抱えて小さくなって泣いていた。

泣かないで、アシュリー。

君には笑顔が似合うんだから。

僕は見てた。君は十分にがんばったよ。

第5話：Please , Don't Cry

終わりの日は迫っていた。

でも、こんなラストを望んでたわけじゃなかった。

Please , Don't Cry

君にキスを

すべてのアタックに失敗したアシュリーはあまり部屋から出て来なくなつた。

いつものおしゃべりは鳴りを潜め、相手をしてもらえないチャーリーも寂しそう。

一方、僕はアシュリーをこっぴどく振った男たちの言動を思い出すたびに、はらわたが煮えくり返るような思いだった。

アシュリーのどこがいけないんだ。

どいつもこいつも、なにもわざわざあんな酷い言い方をしなくてもよかっただろう。

どうしてアシュリーがあんなやつらのために涙を流さなきゃいけないんだ。

そもそも、あんな奴らにアシュリーは全然ふさわしくないんだ。

そうだ。彼女は可愛くて、誰よりも優しくて心が綺麗な女の子なのに。

アシュリーはなんだか僕のことも避けているみたいだった。

協力してもらっていた手前、合わせる顔がないんだろっか。

僕とアシュリーの別れの日も近づいていた。

でも、このまま終わりたくはない。

僕はしぶるアシュリーを捕まえてパプリカとトマトをふんだんに使ったカラフルな夕食を振舞った。飲み物はもちろんスプライト。元気を出してもらおうと大きなキャンディーもたくさん用意した。最初は嫌々だったアシュリーも久しぶりに見たキラキラの誘惑には勝てなかったらしく、少しずつ彼女らしい笑顔を見せてくれた。食事の後は二人でキャンディーを食べながら久しぶりにゆっくり話をした。

「ありがとう……ジェフリー。人間は優しくっていいね。魔女は仲間にもあんまり優しくしないんだよ」

僕は、ずっと気になっていた事を問いかけた。

「このままだと、君はこれからどうなるの？」

「成人できない魔女はいららないんだって」

「いらないうてどういうこと？」

「……魔女として必要ないってこと」

アシュリーはそう言うどぶるつと体を震わせた。

「魔女って本当は意地悪で、残酷なんだろう？まさか仲間を殺したりはしないよな？」

目を見開いて怯えたように僕を見てから、慌てて首を横に振った。

「知らない」

殺されるなんて……！！

でも、絶対にないと言い切れない。

アシュリーは嘘が下手だ。そして嘘が嫌いだ。

「アシュリー、本当の事を言ってほしい。君は本当に殺されるのか？」

僕はいつもより低めの声で真剣な表情で問いかけた。彼女はぎゅっと目をつぶるとまた小さく震えた。返事はしなかった。そんなアシュリーを見て僕は思わず告げていた。

「キスしようか、アシュリー。君とならキスしてもいいよ」

それを聞いて、アシュリーは急に立ち上がった。

その顔は怒っていた。今まで見た中で一番怖い顔。

「だから嫌だったの！こうなるんじゃないかって思ったから！ジェフリーは優しいから、だから、避けてたのに！」

ああ、そうか。魔女は人間の考えに敏感なのだ。

僕がアシュリーを気にしていることに気づいて避けていてくれたらしい。

でも、何のために？

「だって、君は魔女だぞ！キスして一人前にならなきゃいけないんだろっ！このまま殺されるのを待つつもりかよ！」

「でも、でも、ジェフリーとキスするのだけは、絶対やだ……」

初めてアシュリーに向かって声を荒げた僕に、彼女は泣きそうな顔でそう言った。

そうか……。僕とキスするのはそんなに嫌か。

いつになく強い否定に結構大きなショックを受けた。

そして、次に続いた言葉を聞いてそのショックはさらに深くなった。

「だって、ジェフリーは大切だもん！死んじゃったら嫌だもん！」

今、何だって？

考えるより先に、体が動いた。

気づけば僕は逃げようと後ずさるアシュリーを捕まえて、その唇にキスを落としていた

唇を離すと目が合った。

真っ青な顔をしたアシュリーの大きな瞳から大粒の涙がぼろぼろと零れ落ちた。

「ジェフリーのバカ！・・・・・・バカ！バカ！バカ！バカ！」

アシュリーはフローリングにへたり込んで声を上げて泣き出した。

「ごめん・・・・・・」

ごめんね、アシュリー。

でも君が殺されるなんて許せなかったんだ。

泣きじゃくる彼女をぎゅっと抱きしめながら、なんだか僕も泣きそうになった。

次の日の朝、アパートの部屋にアシュリーの姿はなかった。

「この部屋、ジェフリーにあげる。ありがとう。」

それだけを書き残して君は行ってしまった。

アシュリー、君を泣かせるつもりじゃなかったんだ。

こんな風に終わりたいわけじゃなかった。

君と笑顔でお別れがしなかった。

僕はアシュリーの残した手紙の前で呆然と立ち尽くすことしか出来なかった。

それから10日が過ぎた。

僕はまだ生きていた。

最終話：Waiting for the Candy

僕はまだ生きている。

6・Waiting for the Candy プロローグ

あれからもう10年が経った。

決して忘れることはない、あの夏の出来事。

落ちこぼれの魔女と僕の1ヶ月間のストーリー。

分かってるんだ、アシュリー。

きつと、君に会う事は二度とない。

それでもまだ僕は、ニューヨークを、この部屋を離れられないでいる。

キスは本当に僕の大切なものを奪って、行ってしまったんだ。

今年もまた、ニューヨークに夏が来る。

カラフルなキャンディーはまだ、降らない。

ここまで読んでくださった方、本当にありがとうございました。
お話はこれで完結です。

どうしても、プロローグだけ別に書きたかったんです!!
でも、600字以上ないと投稿できない!!ってことで、あえてここに後書きを書かせていただきます。読まなくても全然問題ありません。

このお話は私の処女作です。

初めての小説、初めての投稿。

最後まで読んでくださって本当にありがとうございました!

感謝、感謝です。

感想をいただけたら本当に嬉しいです。

物語のエンディングはどうでしたか。

決して、ハッピーエンドと呼べるような終わり方ではないと思います。
す。

でも、できるだけ様々に解釈できるよう終わらせたつもりです。

奪われたものはジェフリーの心か、それともアシュリーそのものか。
アシュリーは心優しいジェフリーとのキスで他の魔女たちに認められたのか。

そして大切なものを失ったジェフリーはこれからどんな一生を過ごすのか。

ストーリーは今もまだ、続いています。

ニューヨークにカラフルなキャンディーが降る日はやって来るのでしょうか。

きっと、魔女は長生きです。

そして、アシュリーはのんびり屋さん……

暇な時、空を見上げて、ああ、そんなこともあつたらおもしろいなあって思い出してもらえようなお話になっていれば幸いです。

カオリエンドウ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1586e/>

魔女とキャンディーと僕とキス

2011年1月26日03時17分発行